平成３１年２月２０日（水）

老球の細道４６４号

負けず嫌い

昨年爆発的にヒットを飛ばしたダ　パンプの曲「Ｕ・Ｓ・Ａ♪」にはまってしまったわが孫たちはアメリカ国旗に興味を覚えた。どこで、何がきっかけになるかわからいものだが、まさに人生一寸先は光（？）。それをきっかけに色々な国の国旗に興味を覚え、国旗から国名もかなりの数わかるようになった。３歳前後の子どもたちの脳みそはアンビリーバブルである。「三つ子の魂百までも」とはよく言ったものである。興味あることはどんどん覚え、そして忘れない。

子育てを手抜きした私は、親馬鹿をやれなかった後悔から爺馬鹿だけは経験して棺桶の中にと思い、早速孫娘の誕生日のお祝いに『国旗カルタ』をプレゼントした。毎日のように国旗名を覚えていく様子を見て、年末から孫娘と１：１で国旗カルタでカルタ取り競争を始めた。カルタはバスケットボールの周辺視野を養ったり手のクイックネス、声を出すのに良いトレーニングなんだと余裕をかまして孫娘との勝負が始まった。

いざ勝負になると５回に１回くらいしか私は取れなかった。１回目は惨敗だった。それから夕食後に毎日のように勝負したが､私も慣れてきて４回に１回は取れるようになった。私にとられると孫娘はものすごく口惜しがり、時には泣き出す始末である。４歳になったばかりであるが、その口惜しがる姿は勝負師であった。将来孫たちにもバスケットボールでトップアスリートになってほしいと願う私にとっては夢のような光景だった。

世界に名を残すトップアスリートの多くは幼少の頃から負けず嫌いだと伝えられている。負けず嫌いな性格が生活の全てにおいてあらわれているという。水泳の金メダリスト北島康介などはじゃんけんや腕相撲などでも猛烈な負けず嫌い魂を発揮していたそうだ。

最近小、中、高校のバスケットボールの試合状況を見ていて、負けず嫌いの子どもたちが少なくなってきているのではないだろうか。勝つために闘争心をむき出しにしてプレイしている選手たちをあまり見ない。無口で黙々とプレイするだけ。勝つために必死になって練習で準備してきているチームはどのくらいあるのか。勝てるゲームを落とし、くやしくて家に帰ってから眠れない夜を過ごす子どもたちはどのくらいいるのだろうか。

何ごともほどほどに、みんな一緒に、そして勝利至上主義が批判される今のご時世からなのか、試合における勝敗へのこだわりが弱くなってきているのではないだろうか。「勝っても負けてもケセラセラ」。だから、いつも同じチームが勝ち、同じチームがずっと負け続ける。そこにアップセットのミラクルは起こらない。作家坂口安吾の言葉「青春とは奇跡を起こすことである」は死語となる。

スポーツは勝敗を争うゲームである。ゲームは勝つことを目指して全力を尽くすことに意義がある。だからこそ、勝っても、負けてもゲームから、バスケットボールからたくさんの人生訓を学ぶことができる。お互いに勝つことを目標に全力を尽くすことは相手に対する礼儀であり、アスリートとしてのエチケット、マナーである。

大器晩成す。私見であるが、最後に真の勝利者になるのは「負けず嫌いで、素直な子ども」なのではないだろうか。負けず嫌いは努力を厭わない。素直な性格は他人の話を良く聞き、優れたものから謙虚に学ぶ。指導者はそのような子どもたちと一緒にバスに乗って目的地まで出かけたいものである。